

がん化学療法患者に対するお薬手帳を 活用した薬・薬連携推進に向けた取り組み

福石和久[†] 末永 亘^{*} 尾之江剛樹^{**}

IRYO Vol. 72 No. 12 (519-523) 2018

要 旨

近年、がん化学療法は外来化学療法が主流となり、注射抗がん剤は医療機関にて投与され、内服抗がん剤や支持療法薬が保険薬局で調剤されることが増加している。保険薬局では、がん患者における服薬指導において、限られた情報の範囲内で行っていることから、十分な指導は困難であると指摘されている。抗がん剤に対する医療機関と保険薬局との連携(薬・薬連携)による情報共有をより充実させることを目的にアンケート調査を行った。その結果をふまえ、病院と保険薬局の患者情報共有のあり方について検討した。レジメンシールを保険薬局との情報共有の媒体としてお薬手帳に貼付した。多くの保険薬局はがん化学療法に薬剤師が関与していくことは重要であると考えており、そのためには薬・薬連携がさらに必要になるということが判明した。薬・薬連携を充実させていく上で、投与スケジュールが最も必要とする情報であった。また、疑義照会においても投与スケジュールに関する問い合わせが多かった。保険薬局の薬剤師は、情報が少ない中でも積極的に関与し、がん医療に大きく貢献したいということが推察された。がん化学療法に薬剤師がより深く関わっていくためには、お薬手帳などを活用した情報共有は重要である。お薬手帳の利用は、薬・薬連携を円滑に推進することができ、地域連携の強化につながると考えられた。

キーワード 薬・薬連携, がん化学療法, お薬手帳, 保険薬局

目 的

近年、がん化学療法は外来化学療法が主流となり、注射抗がん剤は医療機関にて投与され、内服抗がん剤や支持療法薬が保険薬局で調剤されることが増加

している。このような背景から、効果的で安全な薬物療法を行うための適切な服薬指導が重要と考えられる。しかし、保険薬局では、がん患者における服薬指導においては限られた情報の範囲内で指導を行っているという報告¹⁾²⁾があり、十分な指導は困難で

国立病院機構都城医療センター 薬剤部 (現所属: 国立病院機構九州医療センター 薬剤部・臨床研究センター) * 国立がん研究センター東病院 薬剤部, ** 国立病院機構鹿児島医療センター 薬剤部 † 薬剤師
著者連絡先: 福石和久 国立病院機構九州医療センター薬剤部 〒810-8563 福岡県福岡市中央区地行浜一丁目8-1
e-mail: fukuishi.kazuhisa.fw@mail.hosp.go.jp

(平成30年1月24日受付, 平成30年9月14日受理)

Advanced Approach for Cooperation between Hospital and Community Pharmacies by Using Medicine Notebook for Patients undergoing Antineoplastic Chemotherapy

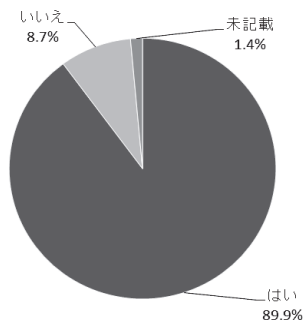
Kazuhisa Fukuishi, Wataru Suenaga* and Tsuyoki Onoe**, NHO Kyusyu Medical Center, *National Cancer Center Hospital East, **NHO Kagoshima Medical Center

(Received Jan. 24, 2018, Accepted Sep. 14, 2018)

Key Words: pharmacists' co-operation, chemotherapy, drug history handbook, insurance pharmacy

表1 アンケート内容

- ① 抗がん剤あるいは支持療法を含む処方箋を調剤した経験はありますか。
- ② 抗がん剤あるいは支持療法について服薬指導を行ったことがありますか。
- ③ 抗がん剤あるいは支持療法を含む処方箋を調剤する時や服薬指導を行う場合に情報不足を感じますか。
- ④ 上記3で「はい」と回答された先生へご質問です。抗がん剤および支持療法に用いる薬剤について説明しづらかったというご経験はありますか。
- ⑤ 上記4で「ある」と回答された先生へご質問です。説明しづらかった薬および説明しづらかった理由について教えてください。
- ⑥ 抗がん剤あるいは支持療法の処方について、疑義照会を行ったことがありますか。
- ⑦ 上記6で「はい」と回答された先生へご質問です。疑義照会を行った項目についてあてはまるものを教えてください。
- ⑧ がん化学療法に薬剤師が関与していくことは重要と思いますか。
- ⑨ がん化学療法を行う上で薬・薬連携がさらに必要になると思いますか。
- ⑩ 上記9で「はい」と回答された先生へご質問です。薬・薬連携を進めていく上で病院薬剤師と共有したい情報を3つ教えてください。
- ⑪ その他、何かご意見等がありましたらご記入ください。



抗がん剤あるいは支持療法を含む処方箋を調剤する時や服薬指導を行う場合に情報不足を感じますか？

図1 アンケート結果（調剤時および患者指導時の情報）

あると指摘されている。そのような問題を改善する目的で、抗がん剤に対する医療機関と保険薬局間との連携（薬・薬連携）が行われてきており、さまざまな取り組み^{3)~5)}が行われている。国立病院機構都城医療センターにおいても保険薬局との連携を図る目的で、症例検討会を企画するなどの取り組みを行っていたが、症例検討会の中で外来がん患者に対する情報提供が少ないと感じる事例を経験した。そこで今回、薬・薬連携による情報共有をより充実させることを目的にアンケート調査とレジメンシールの作成を行い、今後の情報共有のあり方について検討した。

方 法

平成29年2月1日から28日の期間に、都城市北諸県郡薬剤師会を通じて会員の保険薬局（86店舗）に対して無記名方式でアンケート調査を行った。その結果を踏まえ、医療機関と保険薬局との情報共有ツールとして作成したお薬手帳に貼付するレジメンシールについて検討し、がん化学療法における保険薬局への情報提供について考察した。アンケート調査項目を表1に示す。

結 果

1. アンケート調査

アンケートを配布した保険薬局86施設のうち、69施設から有効回答（回収率80.2%）を得た。がん化学療法関連の調剤経験があると回答した薬局は68施設（98.6%）であった。服薬指導を行ったことがあると回答した薬局は66施設（95.7%）であった。調剤時、服薬指導時に情報不足を感じているのは62施設（89.9%）であり（図1）、うち48施設（77.4%）が説明しにくい薬があると回答した。その内訳は、ステロイド剤、漢方薬の順であり、その理由として、服用タイミングがわからない、処方意図がわからない、使用目的がわからない、どの抗がん剤の支持療

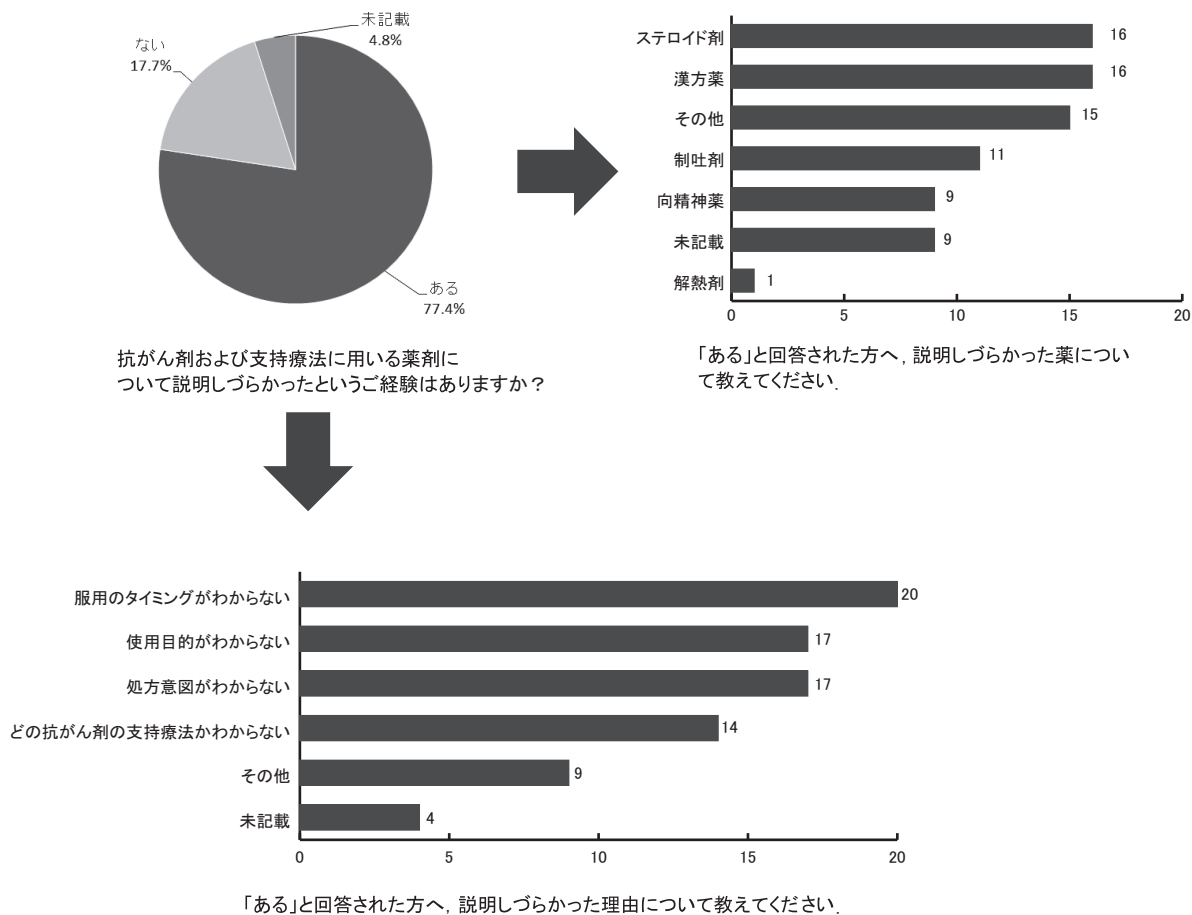


図2 アンケート結果（抗がん剤および支持療法における患者説明）

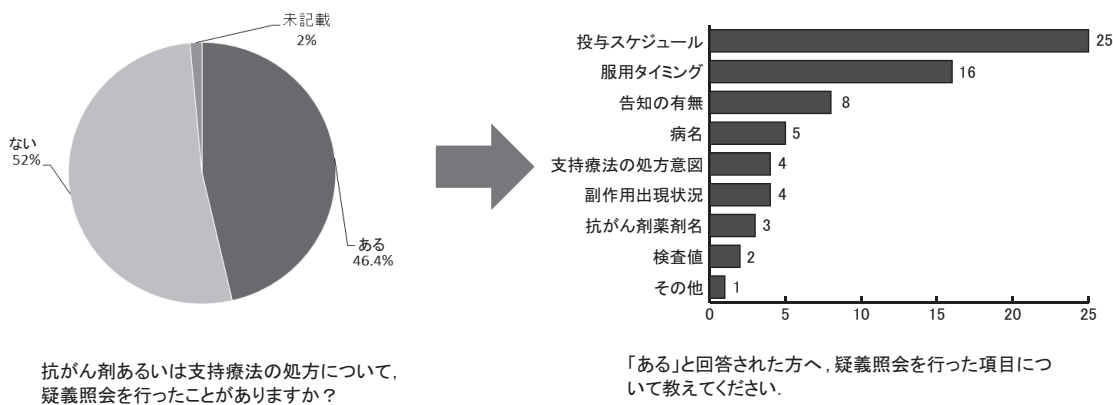


図3 アンケート結果（医師への疑義照会）

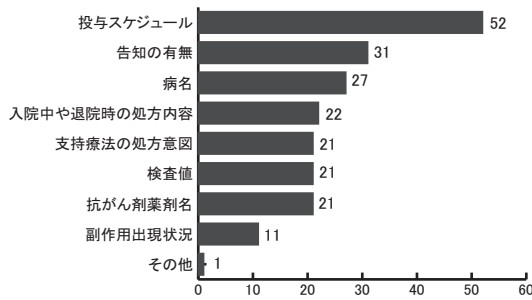
法かわからないという順に高かった（図2）。

疑義照会を行ったことがあると回答した薬局は32施設（46.4%）であった。その内訳は、投与スケジュール、服用タイミング、告知の有無の順に高かった（図3）。がん化学療法に薬剤師が関与していくことは重要であると回答した薬局は66施設（95.6%）であった。また、同時にがん化学療法を行う上で薬・薬連携がさらに必要になると思うと66

施設（95.6%）が回答した。病院薬剤師と共有したい情報として、投与スケジュール、告知の有無、病名の順に高かった（図4）。

2. レジメンシールの作成と運用

保険薬局のアンケート結果を参考に、お薬手帳を用いて医療機関と保険薬局で患者情報を共有する方法として、レジメンシールを作成した（図5）。入



薬・薬連携を進めていく上で病院薬剤師と共有したい情報を教えてください。

図4 アンケート結果（病院薬剤師との情報共有）

院中ががん化学療法が施行され、告知された患者を対象として、施行日、身長・体重・体表面積、レジメン名称、使用した注射剤名、投与量が記載されているレジメンシールを保険薬局との情報共有の媒体としてお薬手帳に貼付した。また、治療スケジュール、使用目的、副作用の症状や出現時期については、服薬指導時に使用している服薬指導シートを用いた。さらに、保険薬局でお薬手帳に副作用を記載することにより、薬局から病院へ情報をフィードバックすることが可能となった。

考 察

今回の調査において、約90%の保険薬局の薬剤師が調剤時および服薬指導を行う時に患者の情報不足を感じており、他の報告と同様¹⁾²⁾⁵⁾の結果であった。がん化学療法の全体が把握できないため、適切な服薬指導が提供されていないことが推察された。そのため、積極的な指導が行えないことから、治療の安全性担保が不十分になることが考えられる。このことから、病院薬剤師から保険薬局の薬剤師に対して情報提供する必要性が強く感じられた。

今回の調査で、最も必要としている患者情報は投与スケジュールであることが判明した。また、疑義照会においても問い合わせが多かったことから、保険薬局の薬剤師は、情報が少ない中でもがん化学療法において必要な情報を収集し、的確な服薬指導につなげたいということではないかと推測される。服薬指導シートとレジメンシールを貼付したお薬手帳を活用することにより、薬・薬連携を推進することができがん化学療法の安全性と有効性を担保できると考える。

本来、お薬手帳は、調剤された医薬品の情報を記

実施日：12月16日（金）
 ID:99991028 発行日 2017年03月23日
 行先 ヤマガタ 108
テスト 薬剤08
 1975年01月01日 42歳 2ヶ月 男
 身長・体重・体表面積 170.00cm 66.3.00kg 1.730m²
 医師名 内科 テスト 医師

01 【レジメン名称】パニツムマブ/BI-WEEKLY CPT-1 1
 点滴
 点滴注射
 生理食塩液 100mL 1瓶
 デキストラン注6.6mg【旧製剤8mg】2mL【デキストロ】 1瓶
 オンダンセトロン注4mgシリンジ【HK】 1筒
 8時に投与
 30分かけてゆっくりと

02 点滴
 点滴注射
 ベクティビックス点滴静注400mg 20mL 378 mg
 【基準投与量】 6mg/kg
 生理食塩液 100mL 1瓶
 8時30分に投与
 インラインフィルターを使用
 60分(100mL/h)

03 精密持続点滴
 点滴注射
 100mL/時
 生理食塩液 50mL 20 ml
 9時30分に投与

04 点滴
 点滴注射
 フドウ糖注射液 5% 250mL(大塚糖液) 1瓶
 トリメチルヒン酸塩点滴静注40mg【タイク】 2 152.6 mg
 【基準投与量】 150mg/m²
 トリメチルヒン酸塩点滴静注100mg【タイク】 5 100 mg
 【基準投与量】 150mg/m²
 10時に投与
 90分かけてゆっくりと

05 点滴
 点滴注射
 生理食塩液 50mL 1瓶
 11時30分に投与
 フラッシュ用

図5 レジメンシール

録するツールではなく、患者におきている事象を患者が記録するものである⁶⁾。医薬品の効果や副作用などの体調変化を患者自身が記録することで患者と情報共有ができ、未然に副作用の重篤化を回避できることが期待され、安全で有効な薬物治療につながると考えられる。そのためには、医療機関、保険薬局の薬剤師はお薬手帳の意義や利用方法について十分説明を行う必要がある。保険薬局と定期的に行っている症例検討会の中で、不明な処方箋やお薬手帳の記載内容を互いに持ち寄り、意見交換を行い問題解決を図ることでお薬手帳の適正な使用につながると考えられる。

がん化学療法に薬剤師がより深く関わっていくためには、お薬手帳などを活用した患者情報の共有化は重要であると考えられる。お薬手帳の利用により、

薬・薬連携を円滑に推進することができ地域連携の強化につながると考えられた。

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。

[文献]

- 1) 中島瑞紀, 中根茂喜, 鈴木善貴ほか. 外来化学療法患者における薬・薬連携強化のためのアンケート調査. 日病薬師会誌 2009; 45: 1621-4.
- 2) 照井一史, 佐藤淳也, 玉田麻利子ほか. 外来がん化学療法における薬・薬連携構築に向けた実態調査と取り組み. 日病薬師会誌 2008; 44: 424-7.
- 3) 園山智宏, 山田弓美, 頼光翔ほか. がん地域連携パスにおける薬剤情報提供書を用いた薬・薬連携のアンケートによる評価. 日病薬師会誌 2014; 50: 269-73.
- 4) 都築美穂, 田中 守, 加戸佳己ほか. 薬・薬連携強化を目指した情報共有ツールの検討 -おくすり手帳とおくすり伝言板の試み-. 日病薬師会誌 2016; 52: 273-6.
- 5) 遠藤征裕, 齋藤雅隆, 森川和夫. 経口抗がん剤単剤に対する病院薬局と保険薬局間の双方向情報共有による共同指導の効果について. 日病薬師会誌 2016; 52: 523-7.
- 6) 土屋文人. 医療安全における副作用情報収集の意義. 薬事 2016; 58: 2815-9.